

<p>経済・経営</p> <p>keyword</p>	<p>【代表的な研究テーマ】</p> <p><input type="checkbox"/> 数理経済学</p> <p><input type="checkbox"/> 経済の一般均衡分析</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 理論経済学 ■ 数理経済学 ■ 数理分析 	<p style="text-align: center;">課題解決に役立つシーズの説明</p>
	<p>【1】数理経済学，経済の一般均衡分析</p>
<p style="text-align: center;">谷川 義行 Yoshiyuki Tanigawa</p>	<p>私の専攻は理論経済学、その中でも特に数理経済学、一般均衡分析と呼ばれる分野にあります。数理経済学とは言うまでもなく数学的な手法を用いて経済の構造分析を行う分野です。一見雑多な経済現象の背後にはある種の共通した原理が働いており、そのような原理は数理的な構造分析によって見通しを付けることが可能であるというある種の確信に基づき、経済学の長い歴史の中で様々な先達の試行錯誤が行われ、やがて、実を結ぶようになりました。そして、経済学においては数理解理解を通じた構造分析はその主要な位置を占めるようになり、現在に至っています。一般均衡分析はこのような経済の数理的構造分析を市場経済に適用することにより、市場の働きを主に価格の観点から解明しようとするものです。</p>
<p style="text-align: center;">経済学部 准教授</p>	<p>一般均衡分析は市場経済の資源配分における市場価格の基本的な役割(例としては市場における需給の調整)、及び、その厚生的な含意(例としては市場の達成した結果に対する効率性の観点からの評価)を厳密な数理的手法により追求する学問分野であり、市場経済分析に厳密な基礎付けを与えるものです。この一般均衡分析という分野において私は市場経済における経済動学的側面(経済成長)や不確実性下の市場経済分析、及び(ある種の)市場経済における不完全性(市場の非完備性や外部性など)に注目して研究を進めてきました。(これらの研究においては、現代数学の一分野である集合位相空間論、凸解析、測度[確率]論、位相幾何、関数解析などが効果的に用いられることになります。微分・積分が数理的な経済学の原動力である時代はるか昔のことにすぎないのです。)また、このような研究を進めるにあたって、基礎論の見直しの必要性も痛感しており、構造分析の観点から「均衡の計算過程(不動点アルゴリズム)」を出発点とする(位相幾何的ないしは代数幾何的な)研究を現代的な視点をもって進めたいと考えています。</p>
<p>【プロフィール】</p> <p>●専門分野</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理論経済学 ・ミクロ経済学 ・数理経済学 ・一般均衡分析 	<p>【2】教育活動など</p>
<p>●略歴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1965年(生年) ・1990年 一橋大学 経済学部 卒業 	<p>大学においては研究活動と共に学生への教育活動もその重要な要素です。滋賀大経済学部においては、私は専門分野を活かす形で経済数学の入門講義や経済理論基礎論の教育を担当しています。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・1995年 一橋大学 経済学研究科 理論経済学専攻 博士課程単位取得 退学 	<p>【3】その他</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・1995年 日本学術振興会 特別研究員(PDF) 	<p>近年の経済状況やまたそれらを巡る言論状況を鑑みるに、(特に理論的な)経済学、ないしは、市場経済というシステムそのものに対し、一般の人々はある種の不信感を強く抱くようになったと見受けられる節があります。理論経済学においては経済合理的な観点を通常議論の出発点としており、経済合理性の表現が数学という基本言語と非常によくフィットすることから、数学を用いた構造分析が発展していったという経緯があるのですが、数学的な議論はどこかブラックボックスめいた感覚を人々に強く与えてしまうのかもしれませんが。しかしながら条理に基づく議論を踏まえて現状を判断することは非常に大切なことであり、議論の限界を見極める上でも何を前提にしているのかを把握しておくことは同様に重要なことです。数理的な分析は条理・限界・前提を意識化する上で非常に優れた方法論です。また、市場経済という経済システムは経済取引の単なる場というだけではなく、(ハイエクの言葉を借りれば)人々の自発的な意志・創意に基づく社会の“自生的秩序”形成を促す重要な契機を与える場でもあります。いたづらに今までの経済学や市場経済システムを敬遠し、また、否定するのではなく、今まで積み上げられてきた学智が何を見落としていたのかを冷静に考え議論を見つめ直すことが今まさに重要なのではないのでしょうか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・1998年 滋賀大学 経済学部 専任講師 	
<ul style="list-style-type: none"> ・1999年 滋賀大学 経済学部 准教授 	
<p>【主な社会的活動】</p> <p>●所属学会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本経済学会 	